

〈特集〉

太平山・太平山神社の信仰地域

小林 宣彦

はじめに

栃木県栃木市鎮座の太平山神社と太平山とは非常に密接な関係にある。同社が鎮座している山であるので、当たり前と言えはその通りなのだが、社伝によれば、天長四年（八二七）に淳和天皇から勅額を賜った際に、天下太平を祈る社として「太平」という社号も賜り、その太平社が鎮座する山なので太平山の名称が付けら

れたとある。太平山に鎮座しているから太平山神社という社号なのではなく、太平山神社が鎮座しているから太平山という名称であるということになる。

太平山は、戦国時代の戦火により、山中の多くの施設が焼け、神社関係の文書も焼失してしまい、中世以前の詳細はよく分からない。江戸後期に書かれた『下野国誌』の「太平大権現」の項によれば、明徳三年（一

三九二) 七月、比叡山竹内御門跡寛如法親王の執奏によつて、後小松天皇の宸翰による額を賜つたとされる。しかしながら、淳和・後小松兩天皇の勅額は、どちらも戦火で焼失してしまつている。僅かに、内々陣の扉の内側に「享徳貳天 癸酉 霜月」とあつて、一四五三年に本殿が修造されたとする記録があるのみである。

また、同社には多くの額が奉納され、近世以降のものが保存されている。國學院大學栃木短期大学では、「栃木県大学・地域連携プロジェクト支援事業」として、太平山神社に奉納された絵馬の調査を行った。それによれば、近世末期以降のものがほとんどであるが、奉納の主体は、村などの地域共同体、問屋などの職業共同体、大々神楽の講組織、剣術・弓術などの道場、和歌の会、個人、商店などさまざまである。詳細は本特集の菱沼一憲論文をご参照いただきたいが、地域も栃木市街(旧・栃木宿・旧栃木町)のみならず、大平町・藤岡町・壬生町などからも奉納されている。

神社は、氏子地域に鎮座し、信仰範囲も氏子地域内であることが多いが、一方で、特別なご利益を求めて、

信仰が広範囲に及ぶ神社も多い。太平山神社は後者に当てはまる。

ただ、『栃木県史』や『栃木市史』などの地誌において、太平山の記述は、天狗党に関係するものがほとんどであり、太平山の宗教施設・宗教組織・年中行事などが歴史的にどのように展開したのかは明らかになっていない。近世には、『雲上明鑑』・『雲上明覽』に、武家伝奏を通して朝廷に執奏する社の一つとして記載され、將軍代替の際には、殿中儀式に参列するなど、朝幕ともに関係する社であつたが、その実態は不明である。それと同じく、太平山の信仰形態や信仰範囲についても詳細は分かつていないのである。

本稿では、太平山・太平山神社の信仰範囲を示す資料をいくつか紹介し、その信仰範囲がどのようなものであつたのか確認していきたい。

一 野木宿道標と下生井道標

近世には、主要な街道沿いや、道が左右に分かれる追分口、宿場や村などの境界に、交通案内としての道標が立てられた。太平山へのルートを示す石の道標も



野木宿道標



下生井道標

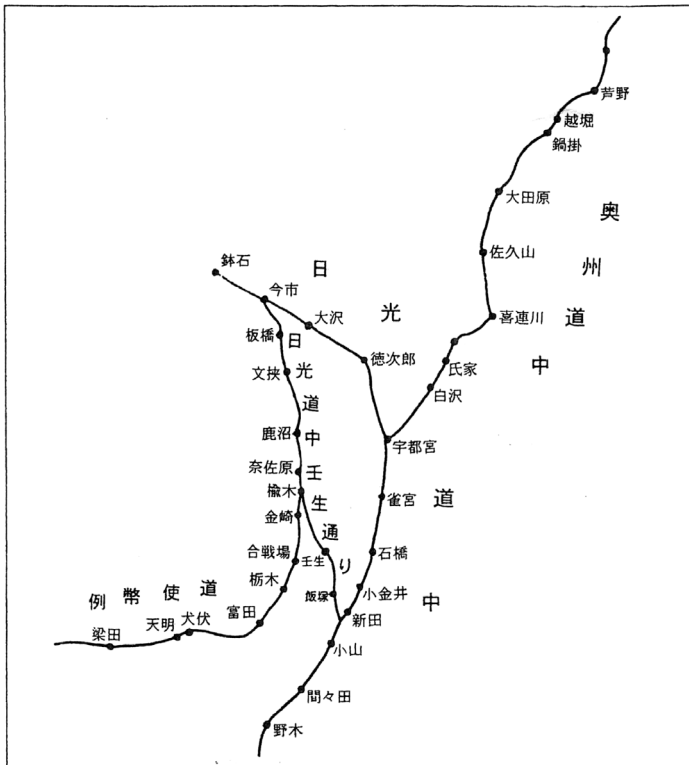


図1 「日光道中と例幣使道」₂

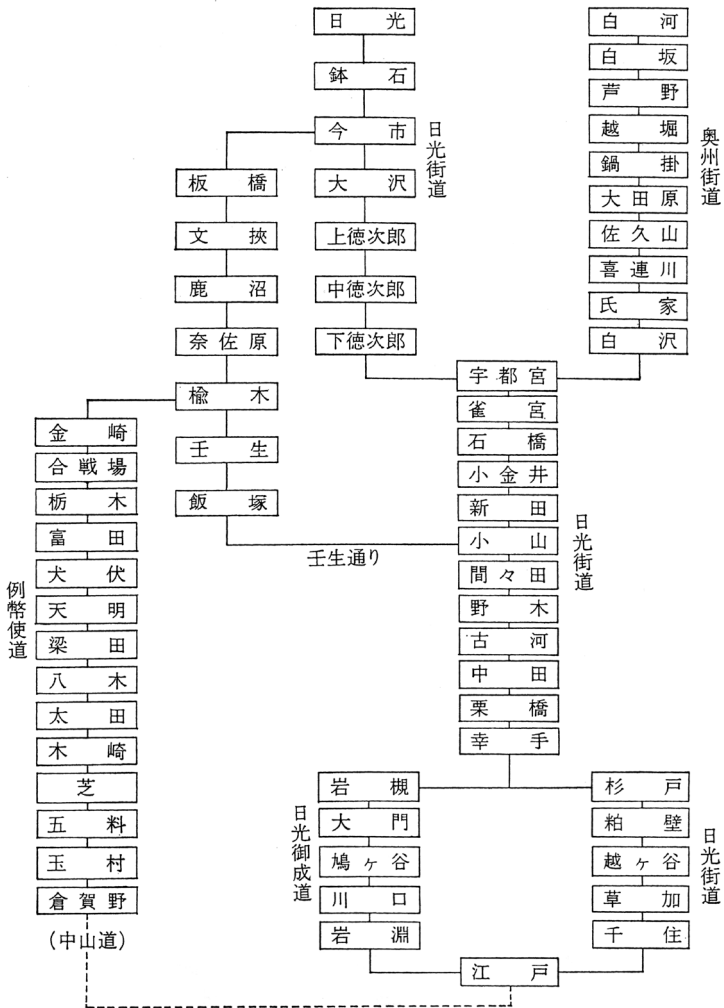


図2 「日光・奥州道中と例幣使道の宿場」³⁾

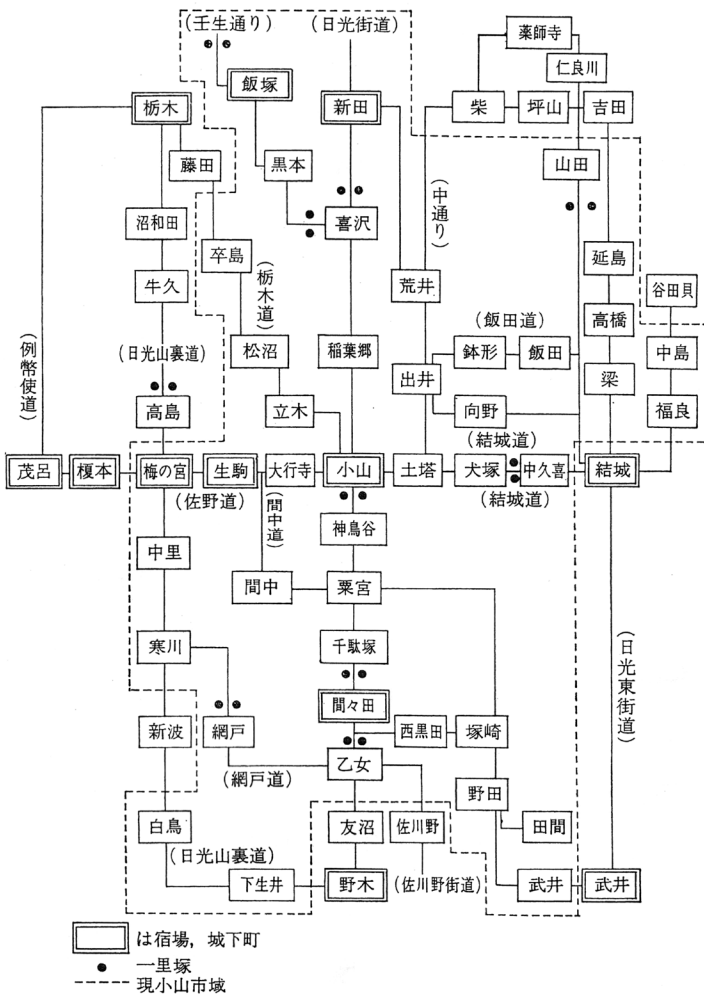


図3 「日光道中と脇道」

造立され、一つは下都賀郡野木町野木に、もう一つは小山市下生井に残っている。前者を「野木宿道標」、後者を「下生井道標」と呼びたい。両道標は、日光道中（日光街道）の野木宿から、下生井を経由して、例幣使道（例幣使街道）の栃木宿へと通じる脇道の道標であった。

日光道中は、江戸―日光を結ぶ街道であり、道中奉行が管轄した五街道の一つである。徳川家康の靈廟のある日光への通路として整備され、將軍家が日光社参のために用いる街道であった。また、近世を通して、老中・高家・大名による日光社・大猷院への代参や、家康や家光の大法会の参列など、幕府の公的行事としての日光社参が行われたが、その際にも日光道中は公式ルートとして機能した。さらに、日光道中は奥州道中にも分岐していたため、奥州の大名の参勤交代にも利用されていた。このように、日光道中は、多くの武家や公家が通行する街道であった。街道には宿駅が設けられ、下野国内では、野木―間々田―小山―新田―小金井―石橋―雀宮―宇都宮―徳次郎―大沢―今市―鉢石の十二宿がそれにあたる。野木宿は、日光道中全

三六里の一七里目にあたる。

また、毎年四月の東照宮例祭に、朝廷から派遣される奉幣使を「例幣使」と呼ぶ。例幣使は、京都から日光まで、中山道と日光道中を通行したが、中山道から日光道中までは、中山道の倉賀野宿から日光道中壬生通りの楡木宿に抜ける街道を利用した。この街道が例幣使道である。例幣使道には、玉村―五科―芝―木崎―太田―八木―梁田―天明―犬伏―富田―栃木―合戦場―金崎の一三宿が設けられた。

日光道中の野木宿と例幣使道の栃木宿の間には、短絡ルートとも言うべき間道があり、その間道は「日光近裏道」と呼ばれる。先述したように、日光道中は日光社参や参勤交代などで利用されるため、とても混雑することがあり、その際には、日光近裏道や日光東街道などの脇道が利用された。日光近裏道は、野木宿から、下生井―白鳥―新波―寒川―中里―梅の宮―高島―牛久―沼和田の地域を通して、栃木宿につながっていた。梅の宮は、現在の南小林である。野木宿道標と下生井道標は、この日光近裏道をしめす交通案内なのである。

栃木宿は、巴波川の河岸を利用して栄えた商都であった。近世は、利根川・渡良瀬川・思川などの河川を通して、さまざまな物資・商品が各地に輸送されていたが、栃木宿はその中継地の一つとして活発に利用されたのである。

ここで、両道標を確認しておきたい。まず、野木宿道標の正面には「是より太平山」と刻まれている。造立された年号なども刻まれていたようだが、磨滅して確認できない。

下生井道標の正面には「是より左太平山道」と大きく刻まれ、下方には「富田」「余」「栃木」「岩船」「一里」と三列に小さく刻まれている。道標の左面には、「嘉永五壬子歳八月建立 下生井大橋」「」とあるから、一八五二年の造立である。右面には、「海老沼忠治右衛門」はじめ造立に協力したと思われる人物たちの名が刻まれている。正面下方に富田（富田宿、現在の栃木市大平町富田）、栃木（栃木宿、現在の栃木市街・岩船（現在の栃木市岩舟町）と刻まれているが、そこには「当所より」とも刻まれているから、下生井道標からの距離をそれぞれ示して

いた。

両道標は、日光近裏道の交通案内のために造立されたと考えられるが、注目すべきは、その正面に刻まれているのが、宿駅の名称ではなく、「太平山」であるということである。

先述したように、日光近裏道や日光東街道などの脇道は、混雑する日光道中を避けるルートであり、日光近裏道がつながる例幣使道の栃木宿は、物資や商品の輸送中継地として栄えた商都であった。それにもかかわらず、両道標に「太平山」と刻まれているのは、日光近裏道が、太平山への参詣路として、大きな機能を果たしていたことを示しているであろう。しかも、道標は、その周辺の人々のためではなく、他所から来る人々に表示するものであるから、日光道中の古河宿以南からの参詣が、非常に多かったことが理解されよう。近世の太平山・太平山神社の信仰圏は、日光近裏道の周辺地域から、下総国の古河（現在の茨城県古河市）や武蔵国まで広がっていたのである。

ただ、こうした他地域からの参詣は、多くは講組織によるものと考えられるが、それがどのような共同体

であったのかは不明である。おそらく、職業を中心とした講や農村を中心とした講など、さまざまな性格の講組織があったと思われるが、その実態については今後の課題としたい。

二 太平山・太平山神社と周辺地域の信仰

太平山神社の表参道は、栃木市街（旧栃木宿・旧栃木町）の方面につながっている。栃木市街は太平山の東に位置するが、太平山神社は南東の方向を向いて鎮座しているから、表参道はゆるやかにカーブしているのである。

表参道が栃木市街につながっている理由の一つは、旧栃木宿以来の栃木市街の人々が多く参詣したためである。もう一つは、古河や武蔵国をはじめとする他地域の人々が太平山を参詣する際に、旧栃木宿方面からの街道を利用したためと考えられる。先述した日光近裏道は、野木宿から沼和田を抜けて栃木宿に入るルートであるから、栃木宿方面から太平山へ通じる道が、参詣の主要路であったと考えられよう。

太平山の南東から南にかけては、旧富田宿のあった

大平町があり、南西には岩舟町がある。そして、その西に犬伏宿や天明宿のあった佐野市がある。日光道中に比べて、例幣使道の佐野・足利方面を経由した信仰を示すものは、あまり残されていない。太平山神社所蔵の額の一枚に、「新田大炊義重廿四世源道純書」とある「永代太々御神楽」の額があるが、これは、太平山別当であった舜慈が、一八世紀末の寛政年間に命を受けて、上野国世良田（現在の群馬県太田市世良田町）の長楽寺に転じたことが関係していると推測される。太平山は、近世まで、神仏習合によって、「太平大権現」とも称されており、その組織は別当が主導していた。別当は天台僧であり、太平山と太田との関係は、天台宗組織を介在して生まれたものと考えられる。

また、大平町や岩舟町と太平山との関係についても、あまり論じられていないが、大平町や岩舟町の多くの集落は、現在でも、太平山神社から「辻札」を受けている。辻札とは、その土地を守り鎮めるための御札であり、集落の境界などにおさめられる。太平山に辻札を受けに訪れる集落は、多くは農村集落であったと考えられる。こうした辻札の授受は、近世以来の信仰形

態を残していると考えられるだろう。

また、太平山神社所蔵の文書には、証文関係の文書が多く残されているが、その多くは太平町である。これは、太平山と大平町の間には、信仰のみならず、もつと生活に密着した関係性があったことを示すものである。これらの文書については、今後、調査・研究がすすめられることを期待したい。

おわりに

以上、本稿では主に、近世の太平山と太平山神社の信仰範囲について確認した。

まず、下都賀郡野木町と小山市下生井に残る二つの道標から、太平山の信仰圏が、野木宿以南の日光道中周辺にもあったことを推論した。

また、栃木市大平町や栃木市岩舟町には、太平山との関係を示す建造物などは残されていないものの、辻札の授受や証文関係の文書などから、近世にはかなり密接な関係にあったことを確認した。

太平山は、朝廷・幕府・日光・江戸など、幅広い関係性を有した宗教組織であり、その組織を支えた信仰圏は、広い範囲に及んでいたと考えられる。そして、近代以降の社会的情勢の変化によって、組織や信仰圏も大きく推移した。今後は、残された資料などを検証し、近世・現代の太平山の実態を解明することが課題となるであろう。

参考文献

- ・『栃木県史』
 - ・『栃木市史』
 - ・『大平町誌』
 - ・『小山市史』
 - ・『野木町史』
 - ・小山市文化財調査報告 第四三集『小山市文化財保護調査年報』四（小山市教育委員会、一九九七）
 - ・『栃木県歴史の道調査報告書』第一集「日光道中 日光道中壬生通り 関宿通り多功道」（栃木県教育委員会事務局文化財課、二〇〇八）
 - ・市制六〇周年記念第六四回企画展「指定文化財でふりかえる小山の歴史」図録（小山市博物館、二〇一四）
- 3 『小山市史』通史編Ⅱ近世の二五八頁「第2図 日光・奥州・例幣使街道の宿場」を引用。
- 4 『小山市史』通史編Ⅱ近世の二六〇頁「第3図 日光街道と市域の脇道」を引用。
- 5 長楽寺にある墓誌によれば、舜慈は「大平山蓮成院」の「諸堂社」を「悉く改作」したとあるから、長楽寺の改修の命を受けての転院と推測される。舜慈は隠居の後、太平山に戻り、そこで葬られたとある。

註

- 1 國學院大學栃木短期大学『栃木県大学・地域連携プロジェクト支援事業成果報告書』（二〇一七・二〇一八・二〇一九）
- 2 『栃木県歴史の道調査報告書』第一集の九頁「図1 下野国内の五街道と周辺の脇街道」を引用。